

# 中学生の高齢者イメージ形成プロセスに高齢者施設訪問経験が与える影響 The Influence of Visiting Facilities for the Elderly on the Image of Elderly People among Junior High School Students

中村正人

(特別養護老人ホーム 神明園)

白澤政和

(桜美林大学大学院老年学研究科)

## 要旨

時代の移り変わりによる家族構成や地域性の変化などで、学校での学習の機会がなければ中学生でも80歳を超える高齢者と直に接したことがない、といった状況が珍しくなくなっている。

本研究では中学生を対象にインタビュー調査を実施し、幼少期からの高齢者イメージ生成プロセスはどういった情報から形成されるのか、更にそこに高齢者施設への訪問経験という実体験がどのように影響し、変化をもたらすのか、といったプロセスの解明を質的に分析した。

分析の結果、高齢者イメージを調査した先行研究で明らかになっていた高齢者に対するネガティブなステレオタイプの存在を確認することができた。そして、施設への訪問の経験が、高齢者イメージに対してそれまでの漠然としたネガティブなものから、リアリティを伴ってポジティブな方向へイメージを変化させる作用があることが示唆された。

キーワード：中学生、高齢者イメージ、世代間交流、体験学習、高齢者施設

## 1. 緒言

### 1) 研究の背景

我が国における少子高齢化はここで語るまでもなく、その対策が国家的急務となっていることは既知のことである。同時に、核家族化する世帯構造の変容が子どもたちと高齢者における接点の減少につながっていることは、様々な場面で実感することができるであろう。

このような現状において高齢者施設（以下 施設）は地域の社会資源として、希薄となったといわれる人間関係の構築や、高齢者との接点としての可能性を数多く有している。中でも、子どもたちが自ら施設に出向き高齢者との接触を経験するといった機会は、学校でその機会

を設定していることが多い。しかし、昨今の児童の学力低下の懸念から現状の義務教育内では高齢者や高齢期についての学習の機会は削減される傾向にあり、十分な教育が与えられているとは言い難い現状がある。

施設で暮らす高齢者にとって小・中学生の訪問があることは、異世代との交流の機会として社会性を保ち、生きがいを高める上で有効な手段の一つであり、高齢者側としても多くの刺激を得ることができる貴重な時間となる。このような世代間交流については書籍や論文等においてその実践の方法の紹介、効果検証といった先行研究や報告は多いが、デメリットを生じるであろうことについて検討されている例は少なく、村山<sup>1)</sup>は「高齢者と子どもの交流にはポジティブな効果がある」といった言説が独り歩きをしている感がある。」と指摘している。

また、新田ら<sup>2)</sup>は、「世代間交流では交流の場を設定・調整する“コーディネーター”の存在が重要であり、そのコーディネーターには交流に参加する高齢者の生活背景、障害、ニーズを、子どもたちには発達段階に合わせた興味関心を、というような双方の特性を理解しプログラムを設定できるスキルが求められる」と述べている。しかし、高齢者施設側で対応にあたるのは主に介護職員で、高齢者側の対応はできたとしても、子ども側への対応は難しいことを筆者は経験してきた。

本研究が研究の対象を中学生としたことは、林<sup>3)</sup>が、「中学生期は児童期までの価値観が揺らぎ始め新しい価値観が身につき始める段階にある」と述べているように、中学生がどういった情報や体験を基に高齢者や老化をとらえ、高齢者像を作り上げているのかを知ることが、中学生が様々なきっかけで施設への訪問を経験する場合において、教育には造詣の深くない施設職員が生徒と接する際に、教育実践の一部を担うことの一助に成り得ると考えたからである。

## 2) 先行研究

高齢者に対する態度やイメージの調査は、海外では1940年代からみられ、その報告は100以上に及んでいる。それらの研究では、多くの研究者は特に若者を対象とする研究において、高齢者に対し否定的なステレオタイプが存在することを明らかにしてきた。日本では同様の研究が1950年代から記録があるも現代とは時代背景など大きく異なるため、現在の状況と当時の状況の比較は妥当ではないと考えた。また、国外の研究知見を用いることも、現代日本の実情との比較においては憂慮すべき点が多々あると考え、本研究では1980年代以降の日本における先行研究を中心にレビューし、桑原ら<sup>4)</sup>と、奥村ら<sup>5)</sup>の2編を中心に以下にまとめることとした。

桑原ら<sup>4)</sup>においては、柴田ら<sup>6)</sup>の著書から、老人像は高齢化が急速にすすむ日本において、マスコミが関連する問題を毎日のように取り上げ老後に懸念される諸処の問題が国民の関心を引く状況を受け、先行研究の比較検討による高齢者イメージの一般社会における「老人観」に関する研究として、1967年から1996年までの12編の研究を老人観の測定対象年代別にま

とめている。

中学生を対象にした研究では、馬場ら<sup>7)</sup>、山本ら<sup>8)</sup>、湯沢<sup>9)</sup>の報告を用い、「中学生も小学生同様に高齢者の情緒面・人格面においては肯定的な認識やイメージを持っており、身体面についてはやや否定的である」とまとめている。また、イメージに影響する要因では「高齢者との交流や経験が強く影響し、特に幼児期や小学校時代に高齢者とのように関わったかが重要である」としている。一方、山本ら<sup>8)</sup>は「高齢者への接し方や意識は低学年の方が、また同居群のほうが、思いやりが高い」と述べ、湯沢<sup>9)</sup>は「同居している方が高齢者のプラス面・マイナス面の両方を感じ取っており、別居群は長所のみを美化している」とし、高齢者のイメージは年齢とともに、肯定的な見方からプラス面もマイナス面も見られるようになる、と報告している。これを中野ら<sup>10)</sup>は、現在より過去にどのような交流を経験しているかということに注目し、高齢者との過去の経験や交流、接触経験の有無を中心とした調査を行っている。しかし、その具体的な内容についての分析は行われておらず、どのような接触経験や交流がイメージにどのように影響しているか、といった研究は今後の課題であるとしていた。奥村ら<sup>5)</sup>では、中学生期を含む青年期以前の時期において高齢者のイメージは比較的肯定的であること、イメージの形成には高齢者との交流経験が関連すること、学年の違いによりイメージが変化する可能性があることが示されているが、同時に「イメージには高齢者への理解度が関連する可能性もうかがえた」とあった。なお、高齢者イメージに関する研究は横断的なものが中心でイメージの変容過程に関する報告は少ない。そこで、国外の研究に知見を求めたところ Lichtenstein ら<sup>11) 12)</sup> による「中学生に教育プログラムによる介入を行った結果、高齢者のイメージに一定の改善効果を得た」という報告や、Sally ら<sup>13)</sup> により「ナースিংホーム入所者に対して、中学生ではないが大学生が半年間訪問して交流をもつことで、入居者の身体面や心理社会的状態が改善され、同時に大学生の高齢者に対する認識が改善された」ことが報告されていた。

また、日本でも多様な世代間交流については、草野<sup>14)</sup>などに代表される多くの研究や報告でその有効性を語られていることが確認できる。中でも、藤原ら<sup>15)</sup> 安永ら<sup>16)</sup>の研究では、児童のボランティア活動における高齢者との交流がイメージの低下を抑制できる可能性があることが示唆されていた。さらに、2010年には日本世代間交流学会が創設され研究が進められている現状である。

なお、先行研究では、“高齢者イメージ” “高齢者観（高齢者像）” “老人観（老人像）”などと、研究者により表現が異なる。引用では原文に準じ記載し、本稿では“高齢者イメージ”に統一した。

### 3) 研究の目的

高齢者施設には福祉に関する体験学習だけでなく、職業体験学習の一体験先として他にもボランティア活動やプライベートな面会など、さまざまな機会が中学生が訪れる。そして、それは彼らにとって、中学生になってからの初めての経験であったり、小学生の時期（それ

以前においても)から施設訪問を経験している生徒もあり、その経験のパターンは多様である。

そこで、現在中学生である生徒が高齢者のイメージを形成してゆく過程では、その構築にどのような情報や経験などから影響を受けるのか、そこで形成されている高齢者イメージには、過去における高齢者施設への訪問経験がどう影響しているのか、についてそのプロセス解明を目的とした。

## 2. 研究方法

### 1) 調査対象者

調査対象者（以下、対象者）は、表1にある「これまでに高齢者施設への訪問経験があり、本人および保護者から研究協力の同意が得られた中学生」9名である。対象者の抽出は、研究協力を得られた東京都H市内の3校において、各学校長より先述の条件を満たす対象者の紹介を受けた。なお、各校のカリキュラムの違いによる偏りを考慮し選出数は各3名と均等にした。

先に述べた“これまでに高齢者施設への訪問の経験がある”という条件では、その経験のあり方が時期・内容ともに多様であり同様の訪問内容での比較が検討されるべきである。しかし、調査協力を得られたH市内では小中学校が行う高齢者施設への訪問体験は、ごく一部の訪問希望のある生徒だけが対象となっている。そのような状況下で均一な訪問体験を有する対象者を抽出することは困難であったため、訪問経験の時期ではなく訪問経験そのものが高齢者イメージの形成にどう影響するのかに焦点をあてることとした。

表 1. 対象者一覧

性別	学年	高齢者施設への訪問経験	
		上段 小学校	下段 中学校
男	1 年	・ 祖父母の面会	
		・ 祖父母の面会	
		・ 学校を介した VO 活動 ※ 1	
男	1 年	・ 学校を介した VO 活動	
		・ 祖父母の面会	
		・ 祖父母の面会	
男	2 年	・ 学校を介した VO 活動	
		・ 学校を介した VO 活動	
男	2 年	・ なし	
		・ 祖父母の面会	
		・ 学校を介した VO 活動	
女	2 年	・ 学校を介した VO 活動	
		・ 職場体験学習 ※ 2	
女	2 年	・ 学校を介した VO 活動	
		・ 職場体験学習	
女	2 年	・ なし	
		・ 職場体験学習	
女	2 年	・ 学校を介した VO 活動	
		・ 職場体験学習	
女	2 年	・ 学校を介した VO 活動	
		・ 職場体験学習	

※ 1 学校を介した VO 活動 = 学校が介在したボランティア活動・演奏や演劇、朗読の披露、などで施設への訪問を行っている経験を総称。

※ 2 本調査協力を得た H 市内全中学校 3 校で中学 2 年生を対象とした共通プログラム。

## 2) 調査の方法

対象者として紹介を受けた 9 名の中学生に対し、後述する倫理的配慮についてその保護者へも説明し面接調査を実施した。調査期間は 2013 年 1 月から 2013 年 2 月で、対象者が学校のプライバシーを保てる部屋で半構造化面接法にて実施した。面接では、高齢者のイメージを形成する情報や体験とは何か、施設で暮らす高齢者との接触体験はそれまで持っていた高齢者イメージに対しどのような変化を与えたのか、その後どう固定化されたのか、を質問の柱だてとした。なお、対象者が中学生であることを鑑み、調査協力説明時にはインタビュー内容を説明し質問を受け、面接当日には開始前に 15 分程度、緊張をほぐすなどの意味で雑談の時間をもった。面接中では各自の語りの内容に応じ質問の順序変更や補足を適宜行い話しやすい状況に配慮し、面接時間は最短 26 分から最長 42 分で、平均すると約 30 分程度となった。録音は開始時に同意を最終確認し後に逐語録化した。

### 3) 倫理的配慮

桜美林大学倫理委員会の承認（受付番号 12033）を得た。対象者が未成年であることから、次のように対象者の不利益回避に配慮した。

#### (1) 対象となる個人の人權擁護のための配慮

会話内容はレコーダーに録音され逐語化されることを説明し、逐語化されたデータは個人を特定できないよう ID で厳重管理し、録音内容は逐語化終了と同時に消去した。また、学校関係者及び保護者からの問い合わせにおいても、個人の面接記録は一切公開しない旨を協力依頼文に掲載した。また、面接への参加協力は本人および保護者の自由意志であり、いつ本調査への協力を撤回しても構わないこと、また、調査対象者が回答したくない質問があれば無理に答えずに構わないこと、その際にいかなる不利益も生じないことを、協力依頼文に掲載し面接開始時にも口頭で確認した。

#### (2) 対象者の同意を得る方法

対象者への研究協力同意は、担当者より対象者および保護者へ依頼文を送付し、対象者と保護者の署名をもって同意の確認とした。なお、保護者の同意を得たうえで調査対象者の研究協力への同意となるよう配慮し、面接調査開始時にも最終的な同意を対象者本人に口頭で確認した。

### 4) 分析方法

本研究における分析は Modified Grounded Theory Approach（以下 M-GTA）を用いた。

M-GTA とは、1960 年代に医療学や看護学の分野で研究功績を残した B. G. グレイザーと A. L. ストラウスによって 1967 年に提唱された、データに基づき理論を導き出すための研究手法である Grounded Theory Approach（以下 GTA）を、木下<sup>17) 18) 19)</sup> が実践的に改変した研究手法である。

本研究の分析テーマは“中学生の高齢者イメージ形成プロセス”と設定した。M-GTA では研究対象となる領域においてプロセスの特性を分析し、理論化することで実践的に現場へ応用が期待できる。また、インタビュー調査から得られるデータの解釈、理論の構築は、調査者の恣意性を前提としており、今後の理論の発展に有意義であると考え M-GTA を分析手法として採択した。

なお、分析過程および分析の結果についてその質を担保するために、分析過程において本論文執筆者間で検討を深めた。そして、それ以上組み込むデータがなくなったこと、それ以上の概念生成はないこと、それら概念の統合、廃止を本論文執筆者間で確認し、27 の概念生成にて理論的飽和とした。以上、生成された 27 の概念（その名を以下＜ ＞で示す）から、概念のまとまりであるカテゴリーを生成した。ただし、1 つの概念でも他概念およびカテゴリーとの関係性から、単独でカテゴリーおよびサブカテゴリーとした概念もある。



### 3. 結果

#### 1) ストーリーライン

次の図1に示す概念図を作成し5つのカテゴリー（以下その名を【 】で示す）、6つのサブカテゴリー（以下その名を『 』で示す）により、ストーリーラインを組み立てた。「 」で示したものは、その概念生成において象徴的なインタビュー内容を紹介している。

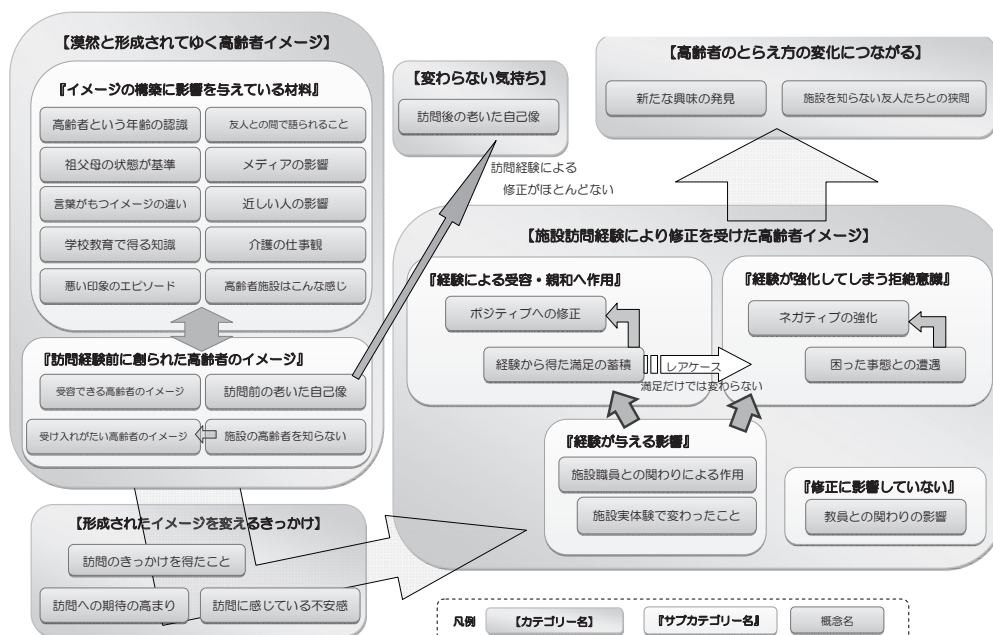


図1. 中学生の高齢者イメージ形成に施設訪問経験が影響するプロセスの概念図

#### (1) 【漠然と形成されてゆく高齢者イメージ】の構成.

高齢者施設への訪問経験前に中学生が高齢者に対するイメージをどういった体験や情報で組み立てるのかを、【漠然と形成されてゆく高齢者イメージ】とした。このカテゴリーは、10の概念からなる『イメージの構築に影響を与えている材料』が『訪問経験前に創られた高齢者のイメージ』につながり、そこには、＜受け入れがたい高齢者のイメージ＞＜受容できる高齢者のイメージ＞＜訪問前の老いた自己像＞＜施設の高齢者を知らない＞（各概念の詳細は後述）などで、受動的に得た情報から漠然と高齢者イメージを規定している状況があった。大局的にみるこのカテゴリーでの高齢者イメージは、すでに否定的（ネガティブなイメージ）な状況が強くなっている様子が見られた。

## (2) 修正の始まり【形成されたイメージを変えるきっかけ】

中学生が高齢者施設への訪問を、自分の意志で“やってみよう”と思えるような環境や状況は少ない。親族などが施設に入所している場合は面会などで施設を訪れる機会を持つ場合もあるが、多くは行政、学校、地域のつながり、ボランティア団体などが施設訪問経験のきっかけとして介在しており、今回のインタビューでも自主的に訪問したという経験の話はなかった。＜訪問のきっかけを得たこと＞では「小学校の何か行事っていうか何か、イベント的な感じの」「老人ホームに行くって決まっちゃって。」という発言に裏付けられる。そこで誰かから何らかの干渉をうけることになるが、その多くは母親の声かけであることがほとんどであり、＜訪問への期待の高まり＞として「うちのお母さんとかが年をとったときにも、まあ、役には立つかなみたいな。」「だから、まあ、できないことをやりたいなっていう」といった話につながる。しかしその反面、＜訪問に感じている不安感＞も存在する。これは「先生も老人ホームの事、よくわからないみたいな感じで。うまく答えてくれないような、そんな感じかも。行く前もよくわからなかったし」「尿とかを、下の何か、手伝いとかしてて、それで何か、そういうのをやったりするかも」といった話から見てとれる。ここで期待と不安はどちらが大きいのかをみると、不安を感じている様子が如実に表れる結果となり、多くの生徒は不安要素を抱えたまま訪問を実体験することになる。しかし、それは後に起こる“修正”に対し、ポジティブな意味で想像と違ったという驚きが反動的な作用へとつながっていた。

## (3) 【施設訪問経験により修正を受けた高齢者イメージ】から起こる実像としてのイメージ再構築。そしてかかわり方の変化へのつながり。

施設への訪問経験はたとえ受動的なきっかけによるものであったとしても、施設職員の見せる高齢者への気遣いや正確な状態の説明を受け、直接のコミュニケーションを通じ人としての存在を実感し、『経験が与える影響』としてそれまで持っていた高齢者イメージを、体験から得たりアリティをもって実像としてのイメージに再構築してゆく。これは『経験による受容・親和への作用』と『経験が強化してしまう拒絶意識』の両極性も同時に生成することになるが、それらを生成する材料となる情報や体験は同一であっても個人の価値観や感性に影響を受けており、分岐を決定づける要素は特定できなかった。そのような中であって＜教員との関わりの影響＞では、体験前後の状況を含め「先生も興味ないっていうか。なんだろう?」「先生も、あぁなんていうかよくわかってないと思います。担任とかもなんか微妙で。」というように語られており、イメージの修正に影響を与えていることがうかがわれる回答はなかった。そして、他には修正に影響を与えていないであろう事象の概念を生成できなかったことから『修正に影響していない』は一概念でのサブカテゴリーとした。

ここから【高齢者のとらえ方の変化につながる】では、イメージをポジティブへ修正した場合は＜新たな興味の発見＞が、「行かなかったら、うーん、全然わからなかったと思います。何かイメージがだんだん変わってきて。うん。もっといろんなことを知らなきゃいけないんだ、みたいな」「学校で行かされるんじゃないくて、自分でボランティア、みたいのできたら



してみたいです」などと明確に語られていた。＜施設を知らない友人たちとの狭間＞では、「私はほんの行ってみたいいろいろわかってよかったけど、でも周りの人は行ってないし、やっぱ嫌だなんていう声を聞くこともあって、えー、そんなところ行ったんですか、とか言われることも……そういうところ行ったんですかって言われて、でも、すごい良かったんだよって言ってもやっぱ、ふーん、みたいな感じで。」「点数稼ぎ、みたいな言われ方することあるし、だったら自分でもやればとか思いますけど、そういうこと言う人はやらないし。」といった話に象徴されるように、自分で有意義と感じられた施設訪問を経験せずに、高齢者をネガティブに語る友人に対しアンチテーゼを示す様子も見られた。なお、興味を持ってない、と感じた生徒では、積極的なかわりを持ちたくないという発言もあった。これは、ネガティブ強化の影響というより、高齢者との関わりにそのものに意義を見出せず“自分の楽しみが優先”といった価値観について、訪問経験をもってしても変えることができなかった例といえる。

また、高齢者のイメージをポジティブに修正したとしても、高齢者に対するイメージと自身が老いてゆくことは、まったく別次元でとらえられていることが明確になった。そこで、「こんなになるっていうか、うーん、何か自分もなるのかなあとか、そういうのはありましたね、そういう人を見ると。」「ああ、それはやっぱり嫌ですよ。でも嫌って言ってもそうなるのわかります。しょうがないことっていうのは施設行ってみてもよくわかったし、そうなったらあきらめます。」「年は取りたくないです。楽しいことなくなってくから。」といった語りから＜訪問後の老いた自己像＞を1つの概念で【変わらない気持ち】として独立させた。

以上、5つのカテゴリー間をまとめると、日々の中で【漠然と形成されてゆく高齢者イメージ】は、【形成されたイメージを変えるきっかけ】を得ることで【施設訪問経験により修正を受けた高齢者イメージ】を経て、【高齢者のとらえ方の変化につながる】をもたらす。これは、高齢者に対する偏見の排除、理解による福祉的思想を紡いでゆくことへつながってゆく。しかし、老化という生物学的変化を中学生では自分の未来としてとらえることができない【変わらない気持ち】という側面も存在するというストーリーラインの構成に至った。

では、施設への訪問体験などで、高齢者とかかわるきっかけを持たない場合はどうなるのか。それは、受動的に得た情報で構築された高齢者イメージを修正する機会がないことを示している。

## 2) 概念の生成からサブカテゴリー生成にいたる補足説明

カテゴリーについてはストーリーラインの中で説明しているので、ここではインタビューデータから生成した27の概念からカテゴリーに含まれるサブカテゴリー生成に至る過程を説明する。表記上カテゴリーを【カテゴリー名】、サブカテゴリーを『サブカテゴリー名』、概念を＜概念名＞、概念を生成するに象徴的なインタビュー内容を「インタビュー事例紹介」として示す。

(1) サブカテゴリー『イメージの構築に影響を与えている材料』について。

中学生はその生活の中で様々な情報ソースなどから高齢者について、様々にイメージを形成している。高齢者と感じる年齢は、訪問経験を得ても興味を持たないのか変化はなかった。自身が意図して収集した情報だけではなく、むしろ一方的に発せられるメディアの情報であったり、無意識の誰かとの会話であったりといった不安定なものも含め選別されていない状態での情報と、一部の印象的な実体験が交錯した状況の中で高齢者イメージは形成されていた。＜高齢者という年齢の認識＞：単純に高齢者といわれる年齢をどうとらえているかを見たが、「人生の半分を過ぎたって、50 過ぎぐらいの～」「～80 とか？でも 60 歳以上かな？」といった回答で訪問経験後においてもばらつきの大きい回答となった。

＜祖父母の状態が基準＞：「人の話聞いててもうちのおじいちゃんと比べちゃうし」「うちのおじいちゃんおばあちゃんとは違う感じ」など、年齢的なことだけでなく祖父母（曾祖父母を含む）の心身的状態などが基準となっていることを確認できた。

＜言葉がもつイメージの違い＞：“老人”“高齢者”“おじいちゃんおばあちゃん”といった言葉がもつ違いを見たが「老人って言われたら、えー、しわしわだなんて感じがします。あと、やさしそうかな。お年寄りって聞いてもそんな感じがします。高齢者はあ、歳をとった人をまとめた感じ？おじいちゃんおばあちゃんは、自分のおじいちゃんおばあちゃんのことかなあ。でも、老人ホームおじいさんおばあさんのところに行きましょうって先生がいったような気がするなあ。なんかよくわかんないです。自分でもどういう使い分けしてたのか説明できないや。」といった回答に象徴されるように使い分けされていない状況で、特に意識されるようなものでもないが印象は異なっていた。

＜友人との間で語られること＞：友人間では高齢者のことを話題にすることは少ないようである。「汚いと動きがキモいとか、ぐずぐずしてるとかですかね。」といった、良い印象ではないもののだけが4例あった。

＜悪い印象のエピソード＞：「よくわかんないことってみたり、突然怒ってみたり」「自分勝手になったり、頑固になったり。年とってるんだから助けてもらって当然みたいな人はちょっとイラッとします。」というように、嫌悪感を抱くような状況の体験はネガティブな印象に直結していた。

＜学校教育で得る知識＞：「～授業ではお年寄りのこと教えてもらったことないです。生徒会にいとそういうチャンスはある。」「～副校長先生が施設のことを話してくれたことはあった。いろんなお年寄りがいるよってような。」というように学習の機会は著しく少ないが、一部の生徒には個別の事情ではあったが情報を得る機会の存在が認められたものの学校の授業内容ではなかった。

＜メディアの影響＞：「たまに何か、おじいちゃんが良いことを言ったりするドラマとかもあるから経験豊富っていう。」といった話もある一方、「番組の名前は忘れたけど、おばあちゃんぽけちゃってみたいなの。で、みんなが困っちゃって、家族がぐっちゃになるような。」といったものもあった。テレビ番組を主とするメディアから受けている影響は、意図して得よ

うとした能動的情報収集ではない。語られることの多くはネガティブな要素が目立つ結果となったが、記憶に残るテレビ番組の内容は、ネガティブな印象のものが多くと考えるのが妥当であろう。

＜近しい人の影響＞：「親が年取りたくねえみたいな話をしてるし。」「姉ちゃんが何か、前、何か、老人ホームの施設の人になりたいって言って、そのときに下のお世話とか～」といったように、近親者等から聞く話はネガティブな思いを抱かせるものが多かった。

＜介護の仕事観＞：「お父さんが高齢者のこと大事な仕事だよって。」という話からは、“大変”という側面も感じているようである。そして「家族が大変な思いして介護とかやってるのを見ると、やだなあって思う。」というストレートな回答もあり、大変な仕事の対象が高齢者であるという感覚も持っていることが語られていた。

＜高齢者施設はこんな感じ＞：「なんていうかあ、暗い感じ？ああ、こう、へんなにおいがしたり…」「閉じ込められているのではないかという感じがしてました。そういう人だから施設にいるというか。」と、訪問前から高齢者施設により印象があると答えた生徒はいなかった。

## (2) サブカテゴリー『訪問経験前に創られた高齢者のイメージ』について。

先述の『イメージの構築に影響を与えている材料』と併せ【漠然と形成されてゆく高齢者イメージ】のサブカテゴリーとした。主たる流れは材料を集めて高齢者イメージを形成する、というプロセスではあるものの、施設訪問体験を行うまでイメージ形成が一方的に成り立つわけではなく、新しい材料の追加があれば修正が行われるという状況をサイクルしていると考えられたことである。

＜受容できる高齢者のイメージ＞：「何か、人生長く生きてるから、だから経験豊富っていう。」「よく話をしてくれてやさしい」という話はあったがそのヴァリエーションは少なく、祖父母との交流が容易な環境にある生徒からの回答に偏った。具体的にイメージできる材料が少ないのであろう。

＜訪問前の老いた自己像＞：自身が老化するということは、想像すらしていない様子もあった。「年とるの、あー、それは嫌。大人になるのはいいけど、あー、なんていうか、自分が老人になるって、あー、無理。わかんない。」というように成長には夢を語るが、老化にはそれがなく「年を取るの、あー、老けてくみたいな、だんだん死に近づく？ような」といったネガティブな話が多い。

＜受け入れがたい高齢者のイメージ＞：非常に多くのヴァリエーションを得た。また、生徒にとって語り易いようで、饒舌に話す者が多かった。「何か、できることが減ったりして、うーん。まあ良いイメージではないですね。いろいろできないことが多くなっちゃうし。」「かわいそうって、やっぱ。なんか、たいへんそうなところを見ると、便利なこともできない。」と悲観性を内包している。

＜施設の高齢者を知らない＞：「みんな元気のない人かと思ってた」「施設にいる人は病気で、弱ってるような感じで、かわいそうな人たちかなあって。家族と暮らしたり、自分で暮らせ

なくなったような人たち」メディアや他人からの影響も無視できないが、施設は障害を持った方が使うといった短絡的な理解から、かわいそうな、大変そうな、という抽象的なイメージを形成していた。

(3) サブカテゴリー『経験による受容・親和への作用』について。

それまで漠然と大局的にはネガティブに高齢者をイメージしていたものが、虚像から実像への転換により発見や感動につながっていた。これは「自分がやったことで人が喜んでくれるっていう……すごく分かりました。」「車いすに座ってるじゃないですか。そこから何か一生懸命立って、僕たちの前まで、前まで来て、何かこう手を握ってくれたりしてるときに、ああ、ちょっと何か」などから生成された＜経験から得た満足の蓄積＞が「お手玉……やったり。その時は、ああ、なんていうか、こんなこともできるんだって。」「あー、思ったより元気な人たちでした。たくさん笑ってくれましたよ。」といった＜ポジティブへの修正＞を生み出していた。

(4) サブカテゴリー『経験が強化してしまう拒絶意識』について。

これは前述『経験による受容・親和への作用』の対極的なものである。虚像であったものが実像となった時に、「話できない人と一緒にいるのはつらいかも。どうしていいかわかんないし。そんな人だけだったらダメだなあ・・・きっと。」「いっしょにいた人がちょっと待っててっていなくなっちゃって、その人と二人きりになっちゃって。うーん、どこか痛いところとかありますか？って聞いても答えてくれないし。」というように＜困った事態との遭遇＞を経験すると、それまで感じていたネガティブなイメージに拒絶的な感情が加わる。そして、「みんな自分のことばっか話してる。ああ、そういう人とはあんまり話したくないし楽しくない。ちょいうざって。」「1人でぶつぶつ言ってる。ずっと、そんな人も見ててかわいそくなった。ていうか、悲しい感じで。」といったように＜ネガティブの強化＞につながっていた。

(5) サブカテゴリー『経験が与える影響』について。

『経験による受容・親和への作用』と『経験が強化してしまう拒絶意識』双方に影響を与える要素として生成した。＜施設職員との関わりによる作用＞は「いろんな人がいるよって。その中でも認知症の人は、なんていうか、ちょっと不思議な感じかもって。言葉で説明してもらっても、ああ、なんていうか、そのよくわからなかったんですが、ああ、実際みて、帰りにまた話きいてああ、なるほど、って感じで。」「あんな風になっても、みてくれる人がいるって感じたし」といった話から生成した。そして、「意外に何か、汚くないっていうか、あんまし。印象が違いました。」「大勢いるんで寂しそうとかはなくて、楽しそうな感じもあるんだ。」といったことから＜施設実体験で変わったこと＞を生成している。これらは、経験をするフィールドや生徒の近くにいる職員の行動や言動も先述の2つのサブカテゴリーに影響を与えていた。

#### 4. 考察

M-GTA による研究ではストーリーラインの作成の段階で分析と考察が同時に進められるため、ストーリーラインは前掲図1の概念図で、本研究でのグラウンデッド・セオリーを既に説明している。そのため、考察の内容がストーリーラインと一部重複することをはじめに記しておく。

##### 1) 高齢者に対するステレオタイプの存在

高齢者に対するステレオタイプは高齢者施設訪問経験以前において顕著であり、高齢者に人生経験から得る知性などポジティブなイメージを感じられているケースは希少であった。これらは生徒自身が情報を収集する能動的行動ではなく、無意識下で受動的に入力される情報の集積から成っており、高齢者についてのポジティブなイメージは、一部で生徒自身の祖父母、曾祖父母から得られる“自分に優しくしてくれる”といった状況から得られていた。大局的にはネガティブな高齢者イメージがステレオタイプとして存在し、桑原ら<sup>4)</sup>のレビューで高齢者イメージをSD法で測定した先行研究、馬場ら<sup>7)</sup>、山本ら<sup>8)</sup>、湯沢<sup>9)</sup>の報告にある「中学生も小学生同様に高齢者の情緒面・人格面においては肯定的な認識やイメージを持っており、身体面についてはやや否定的である」といった知見に対しすでに否定的状況を生じている傾向がうかがわれた。現在、中学生までに触れる情報ソースが多様化している反面、高齢者との接触の機会が減少しているといった影響も考えられたが、この精査は本調査のデータから言及できなかった。ここでもうかがわれたステレオタイプの存在への対応は次項であわせ触れる。

また、時代背景もめまぐるしく変化している現在、高齢者イメージを形成する最たる要因はメディアの影響であることもうかがえた。幼少期から児童期において特に意識せずに視聴していたテレビ番組から、イメージの形成要素となる情報の刷り込み様の状況を起こしており、その記憶に残っていた事柄はほぼネガティブな高齢者イメージにつながっていた。そして、老いた親や祖父母が、自身の“古い”をネガティブに語るその価値観に触れることは、子どもにとって“古い”がネガティブなものとなる強化子に他ならない。そこに、メディアの影響を間接的に受けることで“古い”という生物学的な老化現象を、特に自身に起こるその現象に対して肯定的に理解し続けることは難しいことであろう。生徒が親や祖父母の老いる様子を見て「自分もそうになりたい」と思わないであろうことは想像に難しくなく、生徒にしてみれば認めたくない現実であるといえる。

現代における情報ソースは多様化し、子どもたちにとってテレビを中心としたメディアが主情報源ではなくなっている。インターネット上には無秩序に情報が氾濫し、子どもたちがふれる情報とそれを統制するための学習におけるバランスは重要である。特に国家的急務とされる高齢化対策への啓発を含めた学習の機会では、仮想現実的な机上学習ではなく、実体験を伴う理解の深化を必要とするのであろう。親、祖父母の世代が老いることを否定的に、



ともすれば悲観的に考える要素が多くなった現代社会において、高齢者に対するネガティブなステレオタイプ形成が超高齢社会への対応を阻害するならば、それは教育領域に福祉の現場がかかわり協働する重要な課題である。

## 2) 訪問経験が高齢者イメージに与えた影響

施設への訪問の経験は、高齢者イメージに対してそれまでの漠然としたネガティブなものからリアリティを得ることでポジティブな方向へ変化させる作用があることが確認された。ポジティブへの修正を経た者は高齢者への興味を深めた状態を明確に語り、ネガティブな強化を経てイメージは変わらなかった者でも、結果的にはあったが高齢者への興味を深めている状況が認められたことは大変興味深い。

しかし、小学校の時期やそれ以前などで“親に連れられて”などの受動的な訪問経験でも、無意識にでもネガティブな情報が入力されることで高齢者イメージはネガティブな方向へ向かってしまう。また、不安要素を感じている状態での訪問の経験であったり先の項で述べたステレオタイプのような否定的イメージの形成があったとしても、次項で述べる学校と施設との協働のあり方をふまえ高齢者との接触経験を提供し、情報を正しく伝えられる福祉教育の充実を図るといったことが、高齢者イメージの改善材料になり得る可能性を本研究の結果は示唆している。

## 3) 学校、施設が協働する、経験を有効活用する体験学習（学校介在の各種交流活動等）のあり方

高齢者施設における体験学習は、次世代を担う子どもたちが老化を生物の理として避けて通れないものである事実を高齢者との接触体験を通じて学び、“老いる”ことを理解し受容するための有意義な機会であり、高齢者福祉に携わる専門職が教育機関と協働することは重要である。これは、学習指導要綱<sup>20)</sup><sup>21)</sup>にも明記されており、内閣府発行の高齢社会対策大綱<sup>22)</sup>からも見て取れる。しかし、インタビューでは教員の対応が生徒自身の期待に相応していなかった様子が多く語られていた。残念ながら、生徒の期待に応えられない福祉教育実践者不在の現実的な問題は現状では如何ともし難い。学校単位で福祉の専門教育をプログラム化し、学力向上を課題とされている現状の学校教育の中に、福祉教育プログラムを組み込む余裕がないこともまた既知の事実である。仮に実践を考える教員がいても、生徒に主体性を発揮させるための体験学習をコーディネートし、ファシリテーター（促進）とサポーター（支援）の役割を担うことは、現在の状況では単純な教員の負担増となるであろうことは想像に難しくなく、学校側の事情として都度うかがい知ることができる。

施設においても、学習補助として体系化して対応できる職員が配置されているケースは稀であり、唯一、福祉関係で教育的側面をカバーできる可能性があると考えられる社会福祉士は、施設への設置が必須ではないため配置がないケースが多く、配置があっても本来の高齢者生活支援・介護にかかわる業務遂行のために、生徒を相手に時間を割くことができないといっ



た時間的制約がある。

本研究では生徒の高齢者施設の訪問による高齢者との接触経験が、生徒の情操に対し重要な意味を持ち、人権教育の一環として機能するであろうことは明らかとなった。先述のような問題はあるが、体験による機能を有効に活用するためには、まず、何のための体験かを生徒に対し明確に伝えることが前提であろう。そこで、学校教育において体験学習前の予備知識の学習から、体験中および体験後の学習までをフォローできるようなプログラム導入の必要性を提言したい。その一つとして、教員と学習の対象となる当事者（施設の高齢者）との間にも、相互理解のための対話を持つ機会を設けることに、施設からも積極的に協力してゆく必要があると考えられる。これは、当事者に対しても一福祉教育の担い手である協働者としての位置づけを明確化することにつながる大切な準備であろう。

また、施設職員においては教育の意図することを、学校・教員との協働から理解し、生徒に福祉の専門職としてのスタンスで接することは、自身の仕事に対するアイデンティティを確立することにつながるのではないだろうか。体験学習や生徒が施設に来る様々な活動は、生徒のためだけのものではない、と緒言にて述べたが、学校、生徒、施設、施設利用者のすべてにメリットをもたらすことのできる体験学習のプログラム化実現のために、施設は教育を、教育は福祉を、相互的に理解する機会を継続的にもつ等、より施設と学校との密な協力体制を構築してゆくことは課題である。

#### 4) 本研究の限界と今後の課題

本研究の知見は、調査協力を得られた1つの市、かつその中の3つの中学校から9名の“高齢者福祉施設訪問経験を持つ中学生”を対象としたインタビューの分析結果である。調査協力を得られた中において、知見の応用・実践を考慮した多様な訪問経験の影響を検証する現実的なサンプリングを行ったと考えているが、訪問体験による年齢的（時期的）な差異の検証に対応するデータをそろえることができず、先に記したように一地域のみである偏りということも考慮される必要がある。さらに、小中学校における教育カリキュラムは文部科学省の指導要綱に準じているが、その詳細については教育委員会単位、さらに学校別の特色として、同じ学年であってもそれまでに受けてきた教育の課程が異なり、中学校単位においても高齢者に関する知識の幅を生じている。よって、日本の中学生における高齢者イメージの形成プロセスの説明として普遍的なものであるとは言い難い。

また、施設訪問経験が影響するイメージの修正はポジティブもしくはネガティブ方向への二極化が主である。しかし、希少ながら施設の訪問経験は知らない世界を垣間見ることができたという満足と、そこで出会った高齢者に受容できない異質感を感じているといったアンビバレントな状態も存在していること、経験が負に作用して拒絶意識を持ってしまった場合には、何らかのフォローを誰からも受けられないまま時間が経過してしまうと高齢者との接点からの遠ざかりを起こす可能性が懸念されることも含め、これらは本研究のデータでは分析に及ばなかったため後の課題としたい。

加えて、インタビューに対し生徒自身が社会的望ましさとしての回答をしている可能性も考慮されるべきであるが、そういった回答を分離する精査ができていない。以上のような点から、現時点での本研究の知見は応用に慎重な取り扱いを要すること、ここで得たグラウンデッド・セオリーの要素とプロセスを満たすことが子どもたちからネガティブな要素を払拭し、必ずしもエイジズムにつながるような高齢者イメージを修正できるものではないことを記しておく。

なお、様々な情報の集積が施設訪問前的高齢者イメージを虚像的に形成していることを示したが、高齢者イメージを問うことの中には、高齢者施設そのものに対するイメージやそこに暮らす高齢者のイメージが語りの中に混在してしまう様子も見られていた。この整理も今後の課題につなぐこととなるが、本研究フィールドのような学校教育の中に高齢者福祉に関する指導が少ない状態であっても、高齢者施設訪問の体験は高齢者への認識を再構築し、中学生が高齢者とかかわろうとする姿勢に変化をもたらす可能性がうかがえている。特に＜新たな興味の発見＞で示したヴァリエーションは積極的な行動へつながる可能性を示唆しており、自分の意志で施設へ訪問しようと思う気持ちが醸成されることは、高齢者の理解だけでなく広義において日本の超高齢社会を支えてゆく思考の礎ともなるのではないだろうか。

以上、考察を経ても本研究のグラウンデッド・セオリーは発展の余地を多分に残している。それが M-GTA を分析方法に採択した理由でもあるが、M-GTA の最終目的は実践の現場への応用である。故に、今回提示したグラウンデッド・セオリーも、応用者（ここでは教員や施設で対応する職員にあたる）によって実践の場で修正され応用されることを期待したい。

## 謝辞

本研究にあたり、調査にご協力賜りました中学生の皆様、および調査対象者をご紹介いただき調査の場のご提供等ご高配いただきました各学校長、ならびに諸先生方に心より御礼申し上げます。

## 文献

- 1) 村山陽：高齢者との交流が子どもに及ぼす影響。社会心理学研究, 25：1-10(2009)
- 2) 新田淳子，緒方泰子，広井良典編著：世代間交流の効果に関するミクロ調査。「老人と子ども」統合ケア，中央法規出版，東京(2000)
- 3) 林もも子：愛着と養育のライフサイクルー思春期の子どもの自立と養育者・養育者のアタッチメントの視点からー。こころの科学, 134：92-97(2007)
- 4) 桑原洋子，水戸美津子，飯吉令枝：”老人観”に関する研究の問題。新潟県立看護短期大学紀要, 2：49-51(1997)
- 5) 奥村由美子，久世淳子：高齢者のイメージに関する文献研究：一般高齢者と認知症高齢者に対するイメージ。日本福祉大学情報社会科学論集, 11：57-62(2008)

- 6) 柴田博, 芳賀博, 古谷野亘ほか: 間違いだらけの老人像. 川島書店, 東京 (1985)
- 7) 馬場純子, 中野いく子, 冷水豊ほか: 中学生の老人観-老人観スケールによる測定-. 社会老年学, 38: 3-12(1993)
- 8) 山本浩二, 丹公雄: 中学生の意識調査をとおして. 保健の科学, 37: 746-753(1995)
- 9) 湯沢雅彦: 中学生からみた祖父母との関係. 高齢化社会の世代間交流 (青木和夫). 52-60, 長寿社会開発センター, 東京 (1994)
- 10) 中野いく子, 冷水豊, 中谷陽明ほか: 小学生と中学生の老人イメージ-SD法による測定と比較-. 社会老年学, 39: 11-22(1994)
- 11) Michael J Lichtenstein, Linda A Pruski, Carolyn E Marshall, Cheryl L Blalock, Douglas L Murphy, Rosemarie Plaetke, Shuko Lee: The *Positively Aging*® Teaching Materials Improve Middle School Students' Images of Older People. The Gerontologist, 41(3):322-332, (2001)
- 12) Michael J Lichtenstein, Linda A Pruski, Carolyn E Marshall, Cheryl L Blalock, Yan Liu, Rosemarie Plaetke: Do Middle School Students Really Have Fixed Images of Elders?. Journals of Gerontology Series B, 60(1):37-47(2005)
- 13) Sally Newman, Charles W. Lyons, Roland S. T. Onawola: The Development of an Intergenerational Service-Learning Program at a Nursing Home. The Gerontologist, 25 (2):130-133(1985)
- 14) 草野篤子: 現代のエスプリ第44号. 33-39, 至文社, 東京 (2004)
- 15) 藤原佳典, 渡辺直紀, 西真理子, 李相侖, 大場宏美, 吉田裕人, 佐久間尚子, 深谷太郎, 小宇佐陽子, 井上かず子, 天野秀紀, 内田勇人, 角野文彦, 新開省二: 児童の高齢者イメージに影響をおよぼす要因-"REPRINTS" 高齢者ボランティアとの交流頻度の多寡による推移分析から-. 日本公衆衛生雑誌, 54(9): 615-625(2007)
- 16) 安永正史, 村山陽, 竹内瑠美, 大場宏美, 野中久美子, 西真理子, 草野篤子, 藤原佳典: 中学生の高齢者イメージに与える高齢者ボランティア活動の影響 -SD法による測定と横断分析-. 日本世代間交流学会誌, 2(1): 79-87(2012)
- 17) 木下康仁: ライブ講義 M-GTA-実践的質的研究法 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて. 初版, 弘文堂, 東京 (2007)
- 18) 木下康仁: グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践. 初版, 64-65, 220-221 弘文堂, 東京 (2008)
- 19) 木下康仁: 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA) の分析技法. 富山大学看護学会誌, 6: 1-10(2006)
- 20) 文部科学省: 中学校学習指導要領解説. 道徳編, 121-122(2008)
- 21) 文部科学省: 中学校学習指導要領解説. 総合的な学習の時間編, 105-122(2008)
- 22) 内閣府: 高齢社会対策大綱. 19-20(2012)

# The Influence of Visiting Facilities for the Elderly on the Image of Elderly People among Junior High School Students

Masato Nakamura

(Special Nursing Home Shinmeien)

Masakazu Shirasawa

(Graduate School of Gerontology, J. F. Oberlin University)

**Keywords:** Junior high school student, Image of the elderly, Interchange between generations, Experiential learning, Facility for the elderly

Because family structures and local society change in line with changes in each era, it is not unusual that junior high school students get few opportunities to get to directly know an elderly citizen over the age of 80 if they are not provided with such opportunities at school.

In this study, an interview survey was conducted with targeted junior high school students to qualitatively analyze the kind of information from which a view of the elderly from childhood is formed, and clarify a process of how an actual experience of visiting a facility for the elderly influences on and changes their view.

The study found a negative stereotype of the elderly, confirming the results of prior research on people's views of the elderly. Furthermore, this research suggested that an experience of visiting such a facility acts to change vague, negative views of the elderly held up until that point into those of a positive nature more in line with reality.